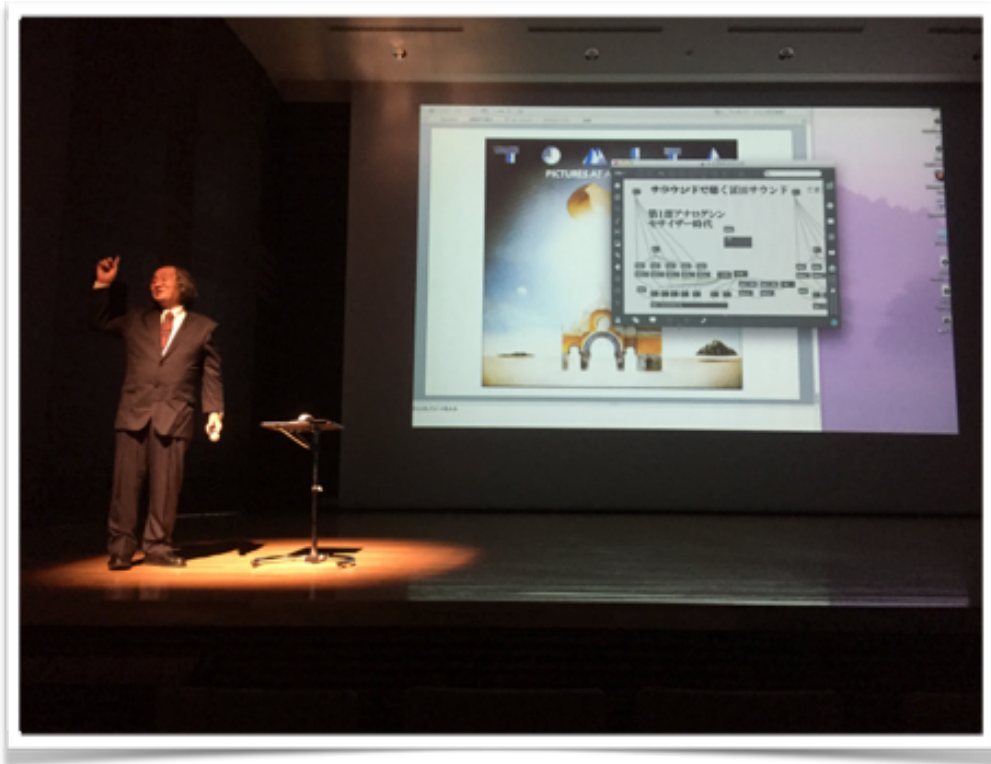


富田先生の作品をサラウンドで聴く会開催される



去る9月18日、5月に逝去された富田勲先生を偲んで「富田先生の作品をサラウンドで聴く会」を開催いたしました。会は2部構成で「1部：アナログシンセサイザーを中心にした作品」と「2部：富田研究室時代の作品」をパストラルホールにて再生しました。



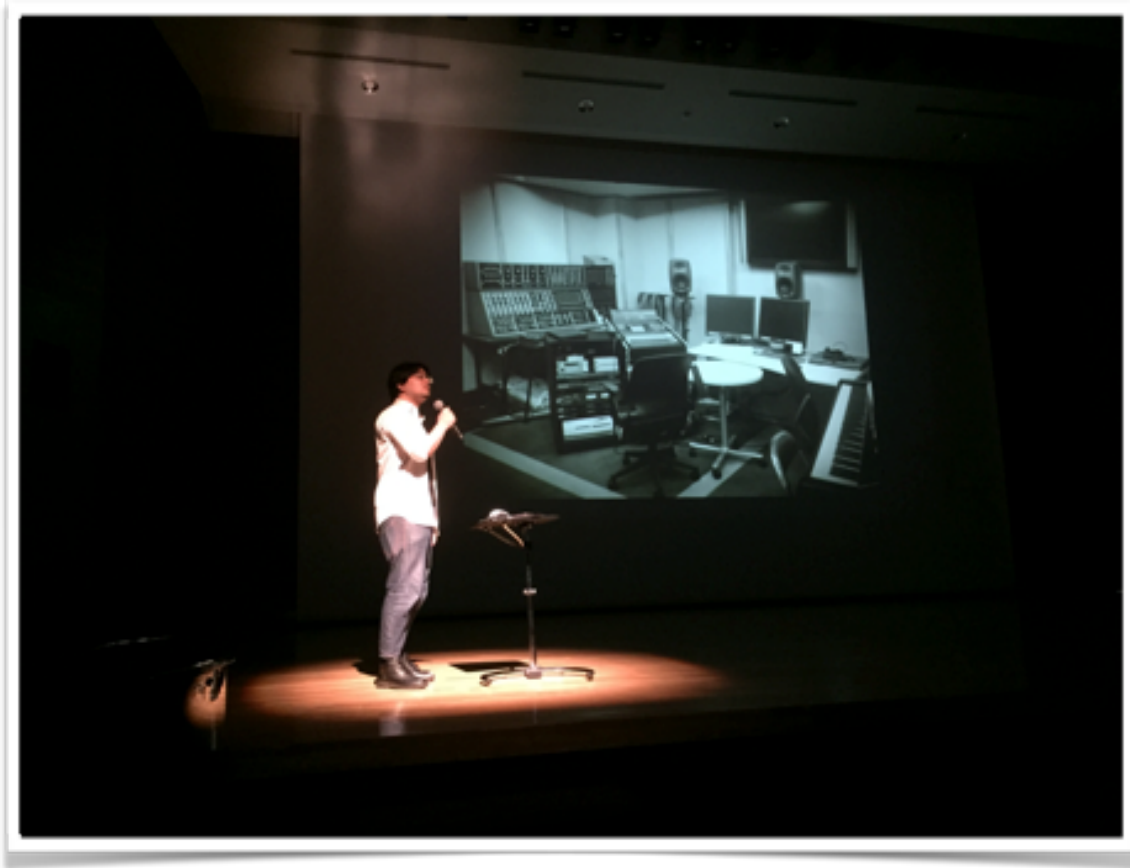
1部：アナログシンセサイザーを中心にした作品

富田先生は本大学開学時に芸術情報学部、音楽表現学科、音楽メディアコースの主任教授、大学院が開設されると大学院教授を歴任、さらに尚美総合芸術センターのセンター長にも就任され教育のみならず社会貢献活動にも力を尽くされました。

大学院では業務レベルのサラウンド環境が備わった富田研究室が設立され、ここでは富田先生独自の「トミタメソッド」を確立し実践的な指導が行われました。音楽創作、音楽製作、また基礎となる音響の実験など研究分野は多岐にわたっています。第2部で講演いたしました漢那拓也専任講師は富田研究室出身で「トミタメソッド」によってさまざまな音楽制作の経験、研究を積み上げてきました。



会場である本学パストラルホールは演奏だけでなく新しい音響を作り出す実験室としても活用できます。最大20CHのマルチチャンネル再生に対応しております。壁に埋め込まれた高性能スピーカーシステムと舞台上の大型スピーカーシステムによって高いクォリティーでサラウンド音響を構成し、再生することが可能です。今回はハイレゾリューション（96K、24bit）のサラウンド音声ファイルを作成し用いております。サラウンドによって富田先生の唯一無二のサウンドがきめ細かく再現され音の動きや広がり、そして響きを楽しめました。かつて私は富田先生とご一緒にサラウンドの授業を音響スタジオで行いました。サラウンドで富田先生の作品を聴く回もありました。ホールでのサラウンド効果は空間の大きさとスピーカーのパワーもあり、なかなかのもので、スタジオで聞くのとは一味違います。特に「パシフィック231」の巨大な機関車が動き始め警笛をあげながら疾走していく重量感と機械の持つ生命感が聴きものです。パストラルホールでのサラウンドサウンドはぜひ先生にお聞かせしたかったと本当に思います。



2部：富田研究室時代の作品

富田先生の作品は科学と芸術の融合によって生まれたとも言えるでしょう。頭の中にある音のイメージを音色からその響きまでを仮説をたてシンセサイザーや録音機材、コンピュータソフトなどを駆使して試行を繰り返します。最終的には実際の音響としてリアライズされます。シンセサイザーやレコーダーなど

のハードウェアやdawなどのソフトウェアは富田先生の手にかかると芸術創造のための強力な道具になる訳です。独特の深みのあるサウンドはこのようにして生み出されました。音楽表現のために富田先生は常に新しい技術に興味を持っておられました。これらから取捨選択して導入し、ご自分の音楽音響を創作するツールとして実に巧みに活用されていらっしゃいました。このことはまさに音楽メディアコースの目指す大きな目標です。今後も富田先生の作品の素晴らしさや先生の音楽音響創作の考え方を後進に伝えていきたいと考えております。